



金沢北ロータリークラブ

例会日：木曜日 12:30～13:30  
 例会場：卯辰山・ホワイトハウス  
 事務局：金沢市尾山町9-13・金沢商工会議所  
 TEL <0762> 63-1151  
 会長：山田 安隆 幹事：大村 精二  
 会報委員長：清水 忠

1974・8月22日

第22号

“終戦の日に思う”

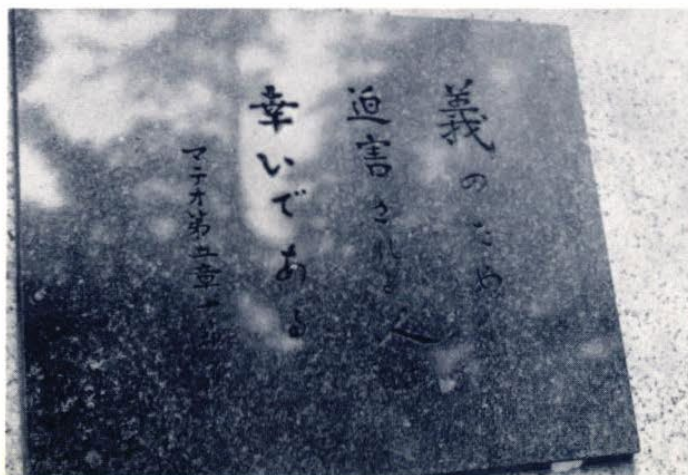
めくるめく暑さと共に、今年もまた終戦の日が来た。

昭和20年8月15日……この日は、日本の歴史の大きな転換期であったと同時に、日本人一人一人にとっても人生の大きく重い一日だったはずである。

それから29年の才月が流れた。今日、あの日を思い起こす人は、もはや日本人の1/3となった。2/3が戦無派であり、「終戦の思出など、あっしには何のか、わりもないことでござんす」という世代が7千万にもなろうとしている。

だが、それでも、いやそうであればこそ戦争を思い起こし、証言を残すことは戦争を知らない世代への我々の責務といわねばならない。

この日、旧盆にあたり観音院に早朝の回向をつとめた会員の心中には、こういった思いと誓いが去来したにちがいない。



卯辰山碑林散歩（4）

—キリシタン殉難碑—

悲しい物語である。

明治2年11月、500名を超えるキリシタンが、時の政府の禁令によって、はるばる長崎からの4百里を、徒歩で送られて来た。

卯辰山の湯座屋や機業場跡が、俘囚同様の彼等の棲家となった。寒さと飢えと改宗への鞭と、そして隔絶された冷たい柵の中で、彼等はキリシタンとしての節を通した。

明治6年3月、釈放されるまでの死亡105名、逃亡1名、出生児44名という悲しい記録、そして100年後の今日も金沢の味覚となっている彼等の内職“かは焼き”が、湯座屋谷にたずむキリシタン殉難碑と共に、哀しい物語を今に残している。



# Renew the Spirit of Rotary

## ◎金沢北RC この一年の成果

(1) 本会計収支決算 (1973.10.3~1974.6.30)

収 入 の 部		支 出 の 部	
入 会 金	1,900,000円	分 担 金	422,610円
会 費	4,525,700円	事 業 費	1,499,186円
創 立 特 別 会 費	1,368,000円	会 議 費	2,456,900円
財 団 寄 附 金	100,700円	交 際 費	116,400円
そ の 他	268,085円	認 証 状 伝 達 式 費	1,440,000円
		事 務 局 費	1,845,785円
		次 期 繰 越 金	381,604円
合 計	8,162,485円	合 計	8,162,485円

(2) 特別会計 ニコニコボックス

収 入 の 部		支 出 の 部	
誕 生 祝 其 他	240,580円	次 期 繰 越 金	240,580円
合 計	240,580円	合 計	240,580円

(3) 認証状伝達式収支決算

収 入 の 部		支 出 の 部	
本 会 計 よ り	1,440,000円	本 部 費 ・ 登 録 費	463,110円
会 員 特 別 会 費	1,900,000円	会 場 費	1,161,075円
登 録 料	2,150,000円	宴 会 費	1,480,720円
寄 附 金 ・ 雑 収 入	482,000円	記 録 費	1,402,710円
		記 念 事 業 費	1,000,000円
		お 土 産 費	441,300円
		本 会 計 へ 戻 入	23,085円
合 計	5,972,000円	合 計	5,972,000円

## ◎金沢北RC これからの一年の予算

(1974.7.1~1975.6.30)

(1) 本会計収入予算 (会員会費は月@15,000円に)

収 入 の 部		支 出 の 部	
入 会 金	100,000円	分 担 金	482,716円
会 費	7,635,000円	事 業 費	1,823,000円
雑 収 入	15,540円	会 議 費	3,230,000円
前 期 繰 越 金	381,604円	交 際 費	80,000円
		事 務 局 費	1,760,000円
		基 本 金 繰 入 費	600,000円
		予 備 費	156,428円
合 計	8,132,144円	合 計	8,132,144円

(2) 委員会編成 (簡素な9委員会制を採用) (1974~1975)

委員会	内 容	委 員 長	委 員	委員会	内 容	委 員 長	委 員
社会奉仕	社 会 奉 仕 年 全 少 都 市 安 全 ローターリー梅林	若野 三郎	小林 隆二 塩村喜代次 岡田林太郎(兼)	企 画	プログラム クラブ細則	吉田 昭炳	笠間 恒次 大場 勝雄
国際奉仕	国 際 奉 仕 ローターリー財団 米山記念奨学会	宗田市太郎	高田 全 依 外 代 吉 東 元 深 泉 武 義	情 報	会 報 報 誌 広 雑 報 誌 ク ラ ブ 歴 史	清 水 忠	小 杉 守 男 山 上 啓 介 山 岸 与 作 三 田 良 信(兼)
職業奉仕	職 業 奉 仕 四 つ の テ ス ト	木田 忠男	岡部 三郎 桜井健太郎 柴田 三郎(兼)	親 睦	親 睦 活 動 家 族 関 係	釣 見 栄 一	平 尾 信 明 長 野 幸 雄 米 沢 修 一
例 会	出 席 コ ニ 会 場 監 督	大海 徳次	岡田林太郎 小杉善次 本江他美夫 浅田豊久(兼)	修 練	ロータリー情報 ターケット	柴田 三郎	清 水 忠 由 井 賢 一 上 次 作(兼)
拡 大	会 員 選 考 強 化 分 類 会 員 増 強 分 類	土原 一二	木島 光仁 三田良信 米沢 繁男 山田淳(兼)				

## 寓 話

玄門寺・如来寺住職 吉田 昭 炳

むかし、或る森に大へん仲の良い、み、ずと金魚が棲んでおりました。

或る日、ふとみ、ずは「自分は泥を食糧にしているが、これを食べ尽してしまうと僕の命が無くなるのだ」と気づき、急に不安になり、どうすればよいか解らないので森の王様へ相談に行き、いろいろ苦情を告げると、王様はみ、ずの話聞き終るやいなや、

「人間一人の欲望はヒマラヤを黄金に化しても満足させることが出来ないと聞いているが、お前はみ、ずの分際で、余りにも朧欲なことを考え過ぎる。身分不相応は身の破滅を招くよ。そんな遠い将来のことより、今日一日どうすれば幸福になれるかを考えなさい」

と、いろいろ論じて見たが、み、ずの耳には王様の教えが理解できず、泥が無くなったときの不安を訴え続けるので、王様もみ、ずの強情さにあきれ、何時でも、何処でも泥が食べ易いように、しかも食べた泥が一刻でも長く身体に留まるようにとの配慮から身体を細長くし、あのような不格好な姿に造り変えてしまったのです。

金魚はみ、ずの不体裁な姿を見るにつけ、水の中で僕が一番器量良しで、身体も綺麗いだし、人間様も私を珍重し、愛玩し、称赞して呉れるので、ついついぬぼれ心が生じ、高慢になって来た。

そこで森の王様は金魚を呼び出し、

「お前とお玉じゃくしとどちらが偉く、しかも自由だろうか」と尋ねると、金魚は即座に、

「あんな黒い、汚いお玉じゃくしなんか問題にしません。私の方がはるかに偉く、綺麗いだししかも自由な身です」と答えたので、王様は金魚に、

「お玉じゃくしは汚い水の中に棲んでいるが、その内にしっぽが切れ、やがて手や足が出て来る。そして蛙となって水と陸の両方に棲み、自由な身軽な身体になるのだ。

お前は綺麗いで、人間様に珍重、愛玩されていても水から出ることは出来ないのだよ。水と縁が切れることはお前の死を意味しているのだ。お玉じゃくしから見ればお前の方がはるかに不自由な生活だよ、何故だろう」と云われ、森の動物全部に次のような話をされた。

「皆さん、み、ずのような不格好な姿になってでも朧欲なことを考え、それを押し通そうとするのは正しいことでしょうか？」

なりふりかまわず、ただ儲けさえすれば良いとし、手段を選ばず、がむしゃらに働く姿は丁度み、ずのように不体裁、不格好そのものであり恥しいことです。

また金魚のように虚栄心や名誉欲と云う二つのしっぽが切れなため、自分で自分の身を縛り、不自由な生活をするのは愚なことです」

と、じゅんじゅんと論ずその姿は森の王者に相応しい風格があった。





